

エコ地域デザイン研究センター

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

エコ地域デザイン研究センターは、活動記録映像の公開や法政大学エコ地域デザイン研究センターの年度末報告会、気候変動と雨水活用をテーマとしたシンポジウム、あるいはテリトリー研究会の開催など、学内外の研究者や専門家と連携した研究活動を活発に展開している。佐原市でまちづくり活動を行なうNPO法人との連携に関する協議の場を設けるなど、ユニークな試みもみられ、年度目標の達成に寄与している点が評価に値する。また、図書の刊行や報告書・論文の発表、講演や学会発表への参加など、多岐にわたる相当数の実績が認められ、対外的な成果の発表および社会的還元の実践という点でめざましい実績を積み上げている。エコ地域デザイン研究センター内に設置されている運営委員会には、文理を横断した研究を行なっている専門家が参加しており、多角的な視点からの研究活動を支える組織として注目に値する。今後は、改善点の洗い出しを踏まえた目標設定を通して、研究活動のさらなる充実をめざしていただきたい。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2021年度はこれまでと同様に文理を横断した学内外の研究者や専門家との連携や、図書刊行、論文発表、各種講演会の実施などが評価され、一方で改善点を洗い出し一層の研究活動の充実を図るべきものとされた。外部資金の獲得は当研究センターが抱える大きな課題であり、2021年度においても現時点でプロジェクトの中核をなすテリトリー・プロジェクトのための科研費申請を行ったものの、再び獲得には至らなかった。内部でその要因の分析を進めているが、掲げる「テリトリー」といった名称がやや分かりにくいとの指摘もあり、私たちが目指している研究内容をより分かりやすく伝えることに注力しつつ、次の外部資金の獲得に努めていく。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

エコ地域デザイン研究センターは、活動記録映像の公開や年度末報告会、シンポジウム、研究会の開催などの学内外の研究者や専門家と連携した文理融合の研究活動や、学外組織と連携したプロジェクトによる研究成果や知見の共有などにおいて優れている。

一部外部資金の獲得に成功している一方で、プロジェクトの中核と位置付けるテリトリー・プロジェクトのための科学研究費の申請が2021年度も採択に至っておらず、研究活動を支える財政的基盤の強化が引き続き懸案となっており、懸案の解決に努めることが望まれる。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所(センター)の目的を適切に設定しているか。

1.1①研究所(センター)として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。2018年度1.1①に対応

はい

※理念・目的の概要を記入。

本研究センターの目的は「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することである。とくに、長い歴史のなかで豊かな環境を育みながら、近代化の中でないがしろにされてきた地域資源を再生し、21世紀の都市・地域づくりの大きな柱にすることを目指している。環境のバランスと文化的アイデンティティを失った日本の都市や地域を持続可能で個性豊かに蘇らせるために、〈エコロジー〉と〈歴史〉を結びつける独自のアプローチをとるところに大きな特徴がある。

国内外の専門家とネットワークを形成し、多角的な理念と手法を探求することにより問題解決に取り組んでいく。他の国や地域と比較しながら都市とテリトリー(地域)の水辺空間や自然環境を歴史的な視点を取り入れつつ深く研究し、その再生の具体的な方法を積極的に提言していくこととしている。

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1②に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

兼担研究員・客員研究員から選任した委員による運営委員会を組織している。運営委員会は原則毎月開催する。年度当初の運営委員会にて理念・目的の適切性について検証する。その後の運営委員会で各プロジェクトの進捗状況を確認し、理念・目的に沿った活動が行われるよう審議している。

1.2 研究所（センター）の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①研究所（センター）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2①に対応

はい

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

当研究センターの特色は、学内外の研究者と連携した研究活動が活発であるのみならず、連携対象が研究者に限らず、地域住民・行政・企業・教育機関と多岐にわたることにある。

具体的には「外濠市民塾」のように近隣他大学や三輪田学園、大日本印刷と連携して江戸城外濠の環境改善に取り組むものがある。また、「玉川府中プロジェクト」では府中市や小菅村等の地元住民・自治体と連携し、基層としての中世を手掛かりに武蔵野・多摩地域全体を見渡すプロジェクトを実施している。このようなアプローチは、各テリトリー・プロジェクトとして全国的に展開している。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

特になし。

【理念・目的の評価】

エコ地域デザイン研究センターは、目指すべき方向性を明らかにした理念や目的を適切に設定している。

同センターは、運営委員会を定期的開催し、理念・目的の適切性の検証を行っている。

同センターは、理念や目的をセンターのウェブサイトに掲載し、社会に対して公表している。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

質保証活動は運営委員会において実施、検証している。

運営委員会の構成員はセンター長を含め24名の兼担研究員・客員研究員であり、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。運営委員会では各委員からの報告を受け、それに応じて広く議論を行い、研究活動の質の向上に努めている。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
運営委員会は、文理にわたる専門性を持つ研究者から構成されており、多角的な視点による研究活動を推進することができる。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【内部質保証の評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、運営委員会において、質保証活動が適切に実施されている。
--

3 研究活動

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）2021年度1.1①に対応

<p>※2021年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。</p> <p>1) 第二回気候変動と雨水活用シンポジウム 日時：2021年5月13日（木）16時～17時30分 テーマ：「雨水活用の普及と基準や制度を考える」 会場：ZOOM ミーティングによるオンライン開催 共催：一般社団法人日本建築学会あまみず普及小委員会、公益社団法人雨水貯留浸透技術協会、特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート、雨水基準制度研究会</p> <p>2) 第12回外濠市民塾 日時：2021年5月21日（金）18時～19時30分 テーマ：”濠”で囲まれた日本の都市・・・”外濠”の原景を探る 会場：ZOOM ミーティングによるオンライン開催</p> <p>3) 「未来都市はムラに近似する」刊行記念オンライントーク 日時：2021年7月3日（土）16時～17時30分 テーマ：『未来都市はムラに近似する』発刊記念トーク 会場：ZOOM ミーティングによるオンライン開催 登壇者：北山恒 × 陣内 秀信 × 高橋一平 × 中川エリカ</p> <p>4) 2021年度第3回テリトリーオ研究会 日時：2021年7月5日（土）18時30分～ テーマ：建築・都市・テリトリーオの空間構造を読む—価値の発見とその再生に向けて— 会場：市ヶ谷田町校舎 T205 教室+ZOOM ミーティング 登壇者：陣内、秀信、オリンピア・ニーリオ、福井恒明</p> <p>5) 第13回外濠市民塾 日時：2021年7月21日（水）18時30分～ テーマ：「外濠150年—未完の都市計画公園としての外濠変遷—」</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

会 場：ZOOM ミーティング

登壇者：小藤田正夫

6) シンポジウム「異域から国土へ」

日 時：2021年8月4日（水）17時30分～19時30分

テーマ：「近世蝦夷地の地域情報／日本北方地区史再考」出版記念シンポジウム

会 場：ZOOM ミーティングによるオンライン開催

主催者：法政大学江戸東京研究センター、（共催：法政大学国際日本学研究所／法政大学エコ地域デザイン研究センター）

7) シンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観」

日 時：2021年8月28日（水）14時～16時

テーマ：「中世武蔵国における玉川と国府・国分寺」～歴史的景観と伝承をめぐって～

会 場：ZOOM ミーティングによるオンライン開催

主催者：法政大学江戸東京研究センター、法政大学エコ地域デザイン研究センター

8) 玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会オンライン講演会（第1回）

日 時：2021年10月2日（土）15時30分～17時30分

テーマ：「水理学・水文学的視点からみる玉川上水通水の実現可能性」

会 場：ZOOM ミーティング

登壇者：山田正

9) 第14回外濠市民塾

日 時：2021年10月27日（水）18時30分～20時

テーマ：「タイムトリップ・江戸から東京へ—千代田と江戸城外堀の風景—」

会 場：ZOOM ミーティング

登壇者：後藤宏樹

10) 玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会オンライン講演会（第2回）

日 時：2021年11月6日（土）15時30分～17時30分

テーマ：「玉川上水・分水網の構成と関連遺構100選」

会 場：ZOOM ミーティング

登壇者：辻野五郎丸

11) 第46回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー

日 時：2021年12月18日（土）10時～

テーマ：コロナ、都市の危機と再生を問う「今、真の都市再生とは？」

会 場：富士見ゲート G403 教室

登壇者：陣内 秀信

12) 国際シンポジウム「テリトリーオが実現する持続可能な地域づくり —

日 時：2022年1月30日（土）13時～17時35分

テーマ：『イタリアのテリトリーオ戦略—甦る都市と農村の交流—』

会 場：YouTube Live 【日本語・英語の2チャンネル配信】

13) 2021年度報告会

日 時：2022年2月24日（木）13時～17時

テーマ：恒例の年度報告会

会 場：ZOOM ミーティング

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

エコ地域デザイン研究センターホームページに掲載

3. 1②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等） 2021年度 1. 1②に対応

※2021年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

■ 著書

書名：『Bulletin286 2021 冬号』

著者名：栗生はるか（P. 6-7 寄稿）

標題：都市の記憶から創造する

発行：公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

発行年月：2020年12月

書名：『景観用語事典増補改訂第二版』

著者名：篠原修編，福井恒明

発行：彰国社

発行年月：2021年2月

書名：『土地の記憶から読み解く早稲田』

著者名：ローザ・カーロリ

発行：勉誠出版

発行年月：2021年3月

書名：『steam dreams-The Japanese public bath』

著者名：栗生はるか（P. 14-18 寄稿）

標題：the preservation of Sento, an urban communication hub

発行：国際交流基金 シドニー

発行年月：2021年3月

書名：『都市のルネサンス-イタリア社会の底力』

著者名：陣内秀信

発行：古小鳥舎

発行年月：2021年7月

書名：『地域をデザインする Vol. 1』

著者名：陣内秀信（分担執筆） 日本建築美術工芸協会編

標題：豊かな生活空間、美しい景観を生み出すために

発行：建築画報社

発行年月：2021年10月

書名：建築ジャーナルNo. 1323 「銭湯のある風景」

著者名：栗生はるか（寄稿）

標題：銭湯とまちの関係性

発行：建築ジャーナル

発行年月：2021年11月1日

書名：『a+u』2021年11月臨時増刊号“Infraordinary Tokyo: The Right to the City”

著者名：栗生はるか（寄稿）

標題：地域の生態系を維持する銭湯

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

発行：新建築社

発行年月：2021年11月8日

書名：『日本の風土と景観』

著者名：朴賛弼

標題：EAST ZONE

発行：技文堂（海外出版：韓国）

発行年月：2021年1月

書名：『よみがえる清溪川』（電子版）

著者名：朴賛弼

発行：NABISORI 出版社（海外出版：韓国）

発行年月：2021年12月

書名：『SEOUL CHEONG GYE CHEON STREAM RESTORATION』（電子版）

著者名：朴賛弼

標題：History and urban environment challenge

発行：NABISORI 出版社（海外出版：韓国）

発行年月：2021年12月

書名：『韓屋と伝統集落』

著者名：朴賛弼

標題：韓国の暮らしの原風景

発行：法政大学出版社

発行年月：2022年3月10日

書名（作品名）：『清溪川再生 ソウルの挑戦 -歴史と環境への復活-』日本語版、韓国版、英語版等多数著作活動の評価

著者名：朴賛弼

発行（賞・媒体名）：著作賞・大韓建築学会（海外受賞：韓国）

発行年月（発表日）：2022年4月22日

書名（作品名）：沖縄及び韓国伝統民家の研究、温熱環境研究の多数の業績を評価

著者名：朴賛弼

発行（賞・媒体名）：竹内芳太郎賞（優秀論文賞）・日本民俗建築学会

発行年月（発表日）：2021年5月30日

書名（作品名）：『日本の風土と景観 WEST ZONE』、『日本の風土と景観 EAST ZONE』

著者名：朴賛弼

発行（賞・媒体名）：長尾重武賞・武蔵野美術大学建築学科

発行年月（発表日）：2022年1月15日

書名（作品名）：ハルミ集落南湖家屋扉絵

著者名：朴賛弼

発行（賞・媒体名）：『民俗建築』第160号

発行年月（発表日）：2021年11月

書名（作品名）：『イタリアのテリトリー戦略：甦る都市と農村の交流』

著者名：木村純子・陣内秀信編著

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

発行（賞・媒体名）：白桃書房

発行年月：2022年

書名（作品名）：『持続可能な酪農：SDGs への貢献』

著者名：木村純子・中村丁次編著

発行（賞・媒体名）：中央法規

発行年月：2022年

書名（作品名）：「セツジャーノ・オリーブオイル PDO/アミアータ・テリトリーオ」田中洋編著『ブランド・ケースブック 2.0』

著者名：木村純子

発行（賞・媒体名）：同文館

発行年月：2021

■査読付論文

論文標題：明治初期に始まる東京旧武家屋敷の牧場転用による都市空間の変容について-飯田町・番町への牧場移転集中を例として-

著者名：金谷匡高

雑誌名：日本建築学会計画系論文集

発行年月：2021年3月

論文標題：『蘇聯工人住宅区設計』の北京紡績第二工場に対する影響-中国第一次五カ年計画期の労働者住宅地計画に関する研究

著者名：邵帥、高村雅彦

雑誌名：日本建築学会計画系論文集 第86巻 第787号, 2378-2387

発行年月：2021年9月

■論文

論文標題：サルデーニャで出会った水の聖地

著者名：陣内秀信

雑誌名：NICHE 07(工学院大学建築学部)

発行年月：2020年12月

論文標題：水辺のソーシャルデザインとその未来

著者名：陣内秀信

雑誌名：河川 No. 896

発行年月：2021年3月

論文標題：水害被災地における市街化の経緯と要因-千曲市の農地転用に着目して-

著者名：渡邊真由, 福井恒明

雑誌名：第64回土木計画学研究・講演集 (CD-ROM)

発行年月：2021年12月

論文標題：最上川舟運と河川工学的特性の関係

著者名：堀越義人, 福井恒明

雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17

発行年月：2021年12月

論文標題：明治以降戦前の名所案内本にみる東京の神社に対する関心の変遷

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

著者名：志村遥奈，福井恒明
 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月

論文標題：千代田区を対象とした橋詰空間の変遷
 著者名：藤田景，福井恒明
 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月

論文標題：江戸・明治期の越後平野西部テリトリーオに関する研究
 著者名：齋藤浩志郎，福井恒明
 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月

論文標題：水害被災地における市街地拡大過程-千曲市杭瀬下地区を対象に-
 著者名：萩原隆太，福井恒明
 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月

論文標題：『名所江戸百景』に描かれた江戸の周縁領域
 著者名：相澤航平，福井恒明
 雑誌名：景観・デザイン研究講演集 17
 発行年月：2021年12月

■学会発表（招待講演・国際学会）

発表標題：イタリアが生んだ都市とテリトリーオを読み解く方法の日本への応用
 発表者名：陣内秀信
 学会等名：異文化から何を学ぶか？/19・20世紀のイタリアと日本の交流から考える
 発表場所：鹿児島大学（オンライン）
 発表年月：2021年2月

発表標題：地中海地域と西アジアとの比較都市論—空間人類学の視点から
 発表者名：陣内秀信
 学会等名：（科研研究会）都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究
 発表場所：オンライン
 発表年月：2021年3月15日

発表標題：文京区本郷における銭湯・旅館・喫茶店等での具体的な取り組みについて
 発表者名：栗生はるか，三文字昌也
 学会等名：デジタルアーカイブ学会
 発表場所：オンライン
 発表年月：2021年4月

発表標題：都市と人間—水辺のコスモロジー
 発表者名：陣内秀信
 学会等名：世界運河会議
 発表場所：名古屋市中京テレビ・ホール
 発表年月：2021年5月21日

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

発表標題：Reading the Urban Landscape of Tokyo: Topography and History

発表者名：Hidenobu Jinnai

学会等名：DOCOMOMO 国際学生ワークショップ

発表場所：東京（オンライン）

発表年月：2021年7月28日

発表標題：近代期の東京における搾乳業と都市空間

発表者名：金谷匡高

学会等名：東アジア都市史学会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月

発表標題：テリトリーオの営みが生んだ景観-その再評価と継承の方法-

発表者名：陣内秀信

学会等名：飯田市地域史研究集会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月11日

発表標題：Japanese Architects` Devising of Healthy Housing in Manchuria

発表者名：BAO Muping, TAKAMURA Masahiko

学会等名：4th International Conference of the East-Asian Society for Urban History

発表場所：オンライン

発表年月：2021年9月11日

発表標題：Learning from architecture

発表者名：栗生はるか 他多数

学会等名：日本建築学会建築文化事業委員会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年10月

発表標題：Nuove tendenze nella ricerca sulla storia urbana in Giappone

発表者名：Hidenobu Jinnai

学会等名：Aisu International

発表場所：オンライン

発表年月：2021年11月20日

■学会発表

発表標題：江戸川乱歩邸の空間変遷と暮らし-江戸川乱歩邸の実測調査報告 その1-

発表者名：石樽督和、金谷匡高、砂川晴彦

学会等名：日本建築学会近畿支部研究発表会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年6月

発表標題：江戸川乱歩が構想・増築した洋館・玄関廻りについて-江戸川乱歩邸の実測調査報告 その2-

発表者名：金谷匡高、石樽督和、砂川晴彦

学会等名：日本建築学会近畿支部研究発表会

発表場所：オンライン

発表年月：2021年6月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 特になし。</p>
--

3.1③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）2021年度1.1③に対応

<p>※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対する2021年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2021年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。なお、研究所（センター）に該当するものがない場合は、研究所員によるものを含めることが出来る。但し、この場合は研究所の研究領域に関係するものとする。</p>
<p>評者名：佐藤信 媒体名：読売新聞 書評掲載年月：2020年12月6日 対象著書（著者）：『水都東京-地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』（筑摩書房、2020）（陣内秀信）</p>
<p>評者名：後藤和子 媒体名：文化経済学 第18巻2号 書評掲載年月：2021年9月 対象著書（著者）：『水都東京一地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（陣内秀信）</p>
<p>評者名：大井実 媒体名：西日本新聞 書評掲載年月：2021年9月11日 対象著書（著者）：『都市のルネサンスーイタリア社会の底力』（陣内秀信）</p>
<p>評者名：松田法子 媒体名：都市史研究 8 書評掲載年月：2021年10月 対象著書（著者）：『水都東京一地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（陣内秀信）</p>
<p>評者名：藤村龍至 媒体名：週刊読書人 書評掲載年月：2021年10月29日 対象著書（著者）：『都市のルネサンスーイタリア社会の底力』（陣内秀信）</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 特になし。</p>

3.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）2021年度1.1④に対応

<p>※2021年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p>
<p>当センターでは、月一回の頻度で運営委員会を実施している。運営委員会の構成委員はセンター長を含めた24名の兼任研究員・客員研究員と、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。そのため、運営委員会では各委員からの報告に対し、学内外を問わず、幅広い立場の方々からの意見や指摘を受ける体制が整っている。加えて、各プロジェクトでは、地元の町会や企業、行政との連携が取られているため、事業内容についてその都度評価を受ける柔軟な体制が築かれている。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・エコ地域デザイン研究センター運営委員会議事録</p>

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況 2021年度1.1⑤に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

※2021年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金及び2021年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者（代表・分担の別）、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を簡条書きで記入。

1. 2021年度中に応募した科研費 27件

(1) 研究代表者 6件

- ・福井 恒明 基盤研究(A) テリトリーオによるエコ地域デザイン 5年間総額 47,620千円
- ・木村 純子 基盤研究(B) 持続可能なバリューチェーン構築によるテリトリーオの内発的発展 3年間総額 16,393千円
- ・金谷 匡高 基盤研究(B) 世田谷区における近代建築の再評価に基づく地域形成史の多様性に関する研究 4年間総額 9,541千円
- ・道奥 康治基盤研究(C) 石積み水工構造物の治水・利水・環境機能に関する総合評価 3年間総額 4,198千円
- ・岩佐 明彦 基盤研究(C) 災害時居住環境におけるクロスオーバーモデルの構築 3年間総額 4,980千円
- ・馬場 憲一 基盤研究(C) 人口減少化時代の文化財保存・活用の仕組みとその政策についての研究 3年間総額 2,890千円

(2) 研究分担者 21件

- ・川久保俊, 学術変革領域研究 (A), 再生可能エネルギー主力化に向けたシナジー・トレードオフ構造の包括的解明
- ・福井恒明, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
- ・山道拓人, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
- ・高村雅彦, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
- ・陣内秀信, 基盤研究(S), 文理複眼への転換を方法とする新・江戸東京研究
- ・木村純子, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
- ・高村雅彦, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
- ・岩佐明彦, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
- ・高見公雄, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
- ・今井龍一, 基盤研究(A) (一般), デジタルツイン時代を見据えたホットスタンバイ型の都市全域のデータ管理手法の体系化
- ・今井龍一, 基盤研究(A) (一般), 点群データと3次元モデルの時空間DXに関する研究開発
- ・金谷匡高, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
- ・陣内秀信, 基盤研究(A) (一般), テリトリーオによるエコ地域デザイン
- ・福井恒明, 基盤研究(B) (一般), 地域水系基盤概念に基づいた水インフラとともにある暮らしの再生デザイン手法の開発
- ・川久保俊, 基盤研究(B) (一般), 暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオの地域特性評価
- ・川久保俊, 基盤研究(B) (一般), 社会変革シナリオ探索のための社会・自然生態システム統合モデルの開発
- ・森田喬, 基盤研究(B) (一般), デジタル社会における地図リテラシーの再構築
- ・陣内秀信, 基盤研究(B) (一般), 持続可能なバリューチェーン構築によるテリトリーオの内発的発展
- ・木村純子, 基盤研究(C) (一般), 食農コモン(ズ)のアントレプレナーシップ:フランスとイタリアの比較から
- ・陣内秀信, 基盤研究(C) (一般), 食農コモン(ズ)のアントレプレナーシップ:フランスとイタリアの比較から
- ・今井龍一, 挑戦的研究(開拓), 点群空間マッピングモデルの構築とその利活用に関する挑戦的研究

2. 2021年度実施した科研費 7件

(1) 研究代表者 2件

- ・高村雅彦, 基盤研究(B), 東アジア都市の住宅地形成と集合住宅に関する学術調査 2017-04-01~2022-03-31 1,800,000円 (17H04597)
- ・木村純子, 基盤研究(B), 地理的表示(GI)を活用したSDGsに寄与する農業と農村振興に関する日欧比較研究 2019-04-01~2022-03-31 2,600,000円 (19H01544)

(2) 研究分担者 5件

- ・岩佐 明彦, 基盤研究(A), 応急仮設住宅「学」の確立, 2021-04-05~2026-03-31, 630,000円, (21H04583)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

- ・川久保 俊, 基盤研究(A), リアルタイム生活情報の AI 解析による革新的高齢者ケア改善システムの確立, 2021-04-05~2025-03-31, 300,000 円, (21H04846)
- ・陣内 秀信, 基盤研究(B), 地理的表示(GI)を活用した SDGs に寄与する農業と農村振興に関する日欧比較研究, 2019-04-01~2022-03-31, 0 円, (19H01544(20))
- ・木村 純子, 基盤研究(B) (特設) (基金), 農業と知的財産, 2019-07-17~2022-03-31, 150,000 円, (19KT0014-B)
- ・川久保 俊, 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B)), 都市における暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオに関する国際共同研究, 2019-02-07~2022-03-31, 220,000 円, (18KK0123)

3 科研費以外の外部資金 1 件

(1) 2021 年度実施

研究代表者: 岩佐明彦

交付元: 千代田区

研究課題: 「千代田区における外部空間のニューノーマル」

研究期間: 2021 年 4 月 1 日~2022 年 3 月 31 日

交付額: 689,000 円

(2) 2021 年度中に応募

研究代表者: 岩佐明彦

応募先: 千代田区

研究課題: 「社会的包摂と場所愛着からみた千代田区内の着座空間評価」

研究期間: 2022 年 4 月 1 日~2023 年 3 月 31 日

申請額: 874,000 円

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究開発センターの科研費データ (から抽出・編集作業を行った)
- ・科学研究費データベース「KAKEN」
- ・千代田区からの補助金交付通知書および千代田学事業研究成果報告書

3.1⑥研究所(センター)における研究活動に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。**2021 年度 1.1⑥に対応**

※取り組みの概要を記入。

従来対面で行っていた運営委員会は、継続的にリモート会議として実施している。3.1①に示される各種講演会、シンポジウムなどの殆どは Zoom 等によるリモート形式としている。一部教室を使った対面方式の会議では、十分な大きさの教室を確保するとともに、必要な範囲で人数の制限をかけている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

当研究センターは、学内外の研究者と連携した研究活動が活発であり、さらに連携対象が研究者に限らず、地域住民・行政・企業・教育機関と多岐に渡ることが特色といえる。また、多くのプロジェクトに地元の住民や行政・企業が関わり、活動に対するフィードバックを受けやすい体制にある。

各プロジェクトでは、これまで蓄積してきた成果や研究者のネットワークを活かしながら、対外的に多くの活動を行っている。さらにシンポジウムや論文執筆、報告書刊行により、研究成果の社会的還元を積極的に行っている。

(3) 課題・問題点

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
外部資金の獲得が懸案事項である。千代田学事業については引き続き 2022 年度も採択を受けているものの比較的小額でテーマも限定的である。科研費申請をはじめ、引き続き外部資金の獲得のための努力を続けたい。

【研究活動の評価】

<p>エコ地域デザイン研究センターでは、外濠市民塾等、複数のプロジェクトが実施され、多くのシンポジウムやセミナーが開催されている。同センターの研究員は、学会誌や新聞・雑誌で書評が掲載されたものを含めて数多くの著作を発表し、研究成果を学会等で活発に発信しており、評価できる。</p> <p>同センターは、第三者評価等の外部評価を受けていないが、運営委員会においてオブザーバーからの意見聴取を行ったり、各プロジェクトでは連携先からの事業内容に関する評価を受ける体制となっている。</p> <p>同センターでは、所属研究員による科学研究費の申請が活発に行われていることは評価されるが、プロジェクトの中核と位置付けるテリトリー・プロジェクトのための科学研究費の基盤研究 A の申請が 2021 年度も採択に至っておらず、研究活動を支える財政的基盤の強化が引き続き懸案となっており、開示された不採択の審査結果を分析して研究計画の評価が低い要素を改善するための取り組みを行うなど、懸案の解決に努めることが望まれる。</p> <p>同センターでは、運営委員会をリモート会議として実施し、各種講演会、シンポジウムなどの殆どはリモート形式で開催し、一部教室を使った対面方式の会議では、十分な大きさの教室を確保するとともに、必要な範囲で人数の制限をかけており、COVID-19 への対策が行われている。</p>

4 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

4.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどを配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018 年度 4.1①に対応

B: 改善することができなかった
<p>※教育研究支援体制の概要を記入。</p> <p>当研究センターでは現状では研究活動を支援する TA や RA 確保の予算が確保できていない。兼任研究員・客員研究員の多くが教員であり、各プロジェクトには、教員の研究室・ゼミに所属する学生や、他大学の学生がボランティアで参加することで研究活動を支援している。プロジェクトの内容、形態が多様であることから、固定した TA や RA よりもこうしたボランティアでの支援がむしろ有効に機能する場合も多い。ただし、2021 年度については多くの期間を新型コロナウイルス蔓延防止のために諸活動が制約を受け、従来よりも改善されたはいえない。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>特になし。</p>

4.1②研究所（センター）として、教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>従来は毎月の運営委員会は市ヶ谷田町校舎会議室で対面で行ってきたが、2020 年度から現在までは COVID-19 対応としてリモート形式で実施している。研究所運営に係る事務的内容、また各プロジェクト報告については対面に比して内容が劣ることはない。一方で現在の赴任先が東京から遠方のメンバーについては、リモート実施ということで距離の制約なく運営委員会に参加できるというメリットも生まれている。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>特になし。</p>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と
考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
研究活動を支援する学生にとっても通常の研究活動では経験できない、地域の行政、住民や高校生など多様な人々との交流が実現している。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・
問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入し
てください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
学生をボランティア的に使って進める研究活動支援には限界があるため、外部資金獲得によりある程度の謝金支払いが必要である。

【教育研究等環境の評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、予算的な制約のためTAやRAを雇用していない。各プロジェクトでは、所属 研究員が声をかけた学生たちがボランティアで研究活動を支援してきたが、2021年度は新型コロナウイルス蔓延防止 のために活動が制約を受けた。多くの学生がボランティアとして研究活動にかかわるのは、それが魅力的であること の証左でもあろうが、学生ボランティアによる教育研究支援には限界があろう。十分な外部資金を獲得することで必 要に応じてTA、RA、技術スタッフなどを配置する充実した教育研究支援体制を構築することを期待したい。
--

5 社会貢献・社会連携

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研
究成果等を適切に社会に還元しているか。

5.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018年度5.1

①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組み概要を記入。
当研究センターは学外組織と連携したプロジェクトを多く企画しており、その連携は双方にとって研究成果や知見 を発信共有する場となっている。 外濠市民塾プロジェクトでは、他大学、地元、行政、企業、地元の高校との交流を定期的かつ積極的に行っている。 源流プロジェクトでは、小菅村余沢町の住民、東京農業大学の学生、本学の学生と連携し各種活動を展開している。 「玉川府中プロジェクト」は、「日野プロジェクト」や「外濠市民塾」などこれまで当研究センターが蓄積してき たノウハウを基礎に、地元住民、郷土資料館、教育委員会と連携し様々な学部学科の教員の参加により、活動を行っ ている。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」
や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と
考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
当研究センターの長所・特色は、その研究内容から社会貢献、社会連携を前提としたプロジェクトとして進めてお り、各プロジェクトは、対象地域の行政、住民、他大学等と構築してきたネットワークや成果を活かしながら、進め

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むこ
とができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

てきている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
2021年度においては、COVID-19 対応としてどうしてもコロナ以前に比べると、地域の住民や行政との直接の関わりが制限されてきた。ウィズコロナへと変化していく中で、感染対策に留意しつつ、再びこれら人々との直接の交流の機会を増やしていくことが課題であると考えている。

【社会貢献・社会連携の評価】

エコ地域デザイン研究センターは、外濠市民塾プロジェクト、源流プロジェクト、玉川府中プロジェクトなど、学外組織と連携したプロジェクトが多く、それらの連携は双方にとって研究成果や知見を発信共有する場となっており、社会連携・社会貢献の取り組みとして評価される。

6 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

- 6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。
- 6.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度6.1①に対応

はい
<p>※概要を記入。</p> <p>当研究センターには、センター長を置き、計 24 名の委員から構成される運営委員会を設置している。センター長及び運営委員会の職務・権限等については「サステナビリティ実践知研究機構規程」「サステナビリティ実践知研究機構細則」に規定されている。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「サステナビリティ実践知研究機構規程」「サステナビリティ実践知研究機構細則」 ・エコ地域デザイン研究センター運営委員会議事録

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させるために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
学部の枠を超えた文理協働による運営が行われることにより、総合大学としての本学の特徴を活かした運営が行われている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【大学運営・財務の評価】

エコ地域デザイン研究センターは、センター長を置き、24名の委員から構成される運営委員会を設置している。セ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

ンター長や運営委員会の職務や権限は、サステナビリティ実践知研究機構規程やサステナビリティ実践知研究機構細則に規定されている。

同センターの運営が学部を超えた文理協働によって行われていることは評価される。

III 2021 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	都市とその周辺地域の成り立ちや関係性を、歴史文化・水循環などの観点から総合的に捉える新たな領域概念「テリトリーオ」を提示する。	
	年度目標	「テリトリーオ」概念の精査のために、特定の地域をケーススタディとした研究会を開き、様々な領域の研究者・専門家と意見交換を行う。	
	達成指標	テリトリーオに関して、特定の地域をケーススタディとした研究会を開催。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		佐原をケーススタディとした研究会を行った。2021年3月26日、7月23日、2022年3月25日に研究会を行った。	
改善策	—		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	学術的知見をもとに、近未来の都心部及び都心周縁部のあり方や具体的な地域の姿について、地域と共に議論し社会的な発信を行う。	
	年度目標	地域と共に協議しその成果を発信する場を、単発ではなく持続的に運営する。	
	達成指標	地域と共同した研究会の運営。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		上述した研究会は NPO 法人佐原アカデミアと連携し共同で運営されている。	
改善策	引き続き継続的に研究会を行う。コロナの感染拡大で延期されている現地での研究会の実現を目指す。		
【重点目標】			
「テリトリーオ」概念の精査のために、特定の地域をケーススタディとした研究会を開き、様々な領域の研究者・専門家と意見交換を行う。			
【目標を達成するための施策等】			
研究会開催に向けて準備をすすめる。HP 等で告知し対外的な発信に努める。			
【年度目標達成状況総括】			
昨年度同様 covid-19 の感染状況に振り回される事となったが、ある程度織り込み済みであったこともあり、オンラインシステムを活用するなどしてほぼ予定通りに計画をすすめることができた。ただし、地域との協働にはオンラインでの協議や研究会が不可欠である。現地での交流が実現できる日を心待ちにしたい。			

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】

エコ地域デザイン研究センターの「研究活動」と「社会貢献・社会連携」に関する 2021 年度目標の達成状況は、ほぼ適切である。

同センターでは、重点目標を達成するための施策として、HP 等で告知し対外的な発信に努めることをあげており、実際にプロジェクトの活動などに関する対外的な情報発信がコロナ禍後もウェブサイトを通じて活発に行われていたことは評価される。ただし、活動報告書、著書、論文などを対外的に公表するウェブサイト上の PUBLICATION 情報の更新に 2021 年度以降に滞りが見られる。タイムリーな研究成果の情報発信が行えるよう、ウェブサイトの情報の更新体制を見直すことが望まれる。

IV 2022 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
----	------	------

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

1	中期目標	都市とその周辺地域の成り立ちや関係性を、歴史文化・水循環などの観点から総合的に捉える新たな領域概念「テリトリーオ」を提示するとともに、その内容と意義の明確化を図る。
	年度目標	「テリトリーオ」の概念について、プロジェクトで取り上げている地域において、分かりやすい説明を提示する。
	達成指標	テリトリーオ概念の理解、普及の確認
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	学術的知見をもとに、具体的な地域の近未来の姿について、地域と共に議論しその実現に向けた社会的な発信を行う。
	年度目標	COVID-19 感染対策に留意しつつ、コロナ前の水準程度まで対象地域との人的交流を回復する。
	達成指標	対象地域における対面での交流活動の実施量
<p>【重点目標】 テリトリーオ概念の明確化、分かりやすい伝達。 そのためのプロジェクト展開地域における地域の人々の意見集約。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 一目で概念が捉えられるチャートまたは図のようなものの制作と提示。</p>		

【2022 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

エコ地域デザイン研究センターの 2022 年度目標は 2021 年度も目標の達成状況を踏まえて設定されている。達成指標として設定された「概念の理解、普及の確認」や「活動の実施量」がやや抽象的で、達成度の検証や評価が第三者にも十分に可能な指標が適切に設定されているとはいいがたいため、達成度の検証可能性を確保するために、より具体的な達成指標を設定することが望まれる。

【大学評価総評】

エコ地域デザイン研究センターは、学内外の研究者や専門家と連携した文理融合の研究活動や、学外組織と連携したプロジェクトによる研究成果や知見の共有などにおいて優れている。それらのプロジェクトは学内外の参加者にとって研究成果や知見を発信共有する場となっており、社会連携・社会貢献の取り組みとしても評価される。同センターの研究員は、学会誌や新聞・雑誌で書評が掲載されたものを含めて数多くの著作を発表し、研究成果を学会等で活発に発信しており評価される。

同センターで所属研究員による科学研究費の申請が活発に行われていることは評価されるが、プロジェクトの中核と位置付けるテリトリーオ・プロジェクトのための科学研究費の申請が 2021 年度も採択に至っておらず、研究活動を支える財政的基盤の強化が引き続き懸案となっており、懸案の解決に努めることが望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。